

氏 名	長谷川小眞子（学籍番号 14DN05）		
学 位 の 種 類	博士（看護学）		
学 位 記 番 号	35 号		
学位授与年月日	2025 年 3 月 13 日		
論 文 題 目	精神科看護師における統合失調症患者に対するフィジカルアセスメント能力向上のための教育プログラムの検討		
論文審査担当者	委員長	極原理恵	教授
	委 員	市江和子	教授
	委 員	新宮尚人	教授
	委 員	大石ふみ子	教授
	委 員	河口てる子	教授

論 文 要 旨

I. 研究背景と研究目的

わが国の統合失調症患者の身体合併症に対する精神科看護師のフィジカルアセスメント能力向上に関して、必要な知識・技術の習得および身体合併症看護に対する意識変容を目的とした体系化された教育プログラムは存在しない。

本研究は、統合失調症患者の身体合併症に対する精神科看護師のフィジカルアセスメント能力向上のための教育プログラムを検討することを目的とした。予備的調査は実態調査の基礎資料を得る目的でA県下における精神科看護師を対象とし、実態調査では教育プログラム検討の基礎資料を得る目的で全国の精神科看護師に対し、統合失調症患者の身体合併症に関するフィジカルアセスメントの実態を調査した。作成した教育プログラム（第1案）の実施から、教育プログラム（第2案）の検討を行った。

II. 研究方法

予備的調査はA県下の精神科看護師 415 名に、実態調査は、国立、都道府県立政令市立病院の精神科看護師 1,296 名に対し無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は統合失調症患者の身体合併症に関するフィジカルアセスメントの知識・実施頻度・困難感(各 15 項目ずつ)、身体合併症の発生リスクへの認識と看護実践状況、身体合併症に関する学習ニーズや学習支援方法、記述回答では統合失調症患者の身体合併症に対する看護実践での困難事例等である。分析方法は記述統計、t 検定、一元配置分散分析、ピアソン積率相関係数等を用い、記述回答の質的データはそれぞれの意味内容の類似性でカテゴライズした。

実態調査等の結果から、教育プログラム（第1案）を作成し、専門職者 6 名で内容妥当性を検討した後、A県下の精神科臨床経験 3 年以上の精神科看護師 11 名にプログラムを実施した。教育プログラムの有効性の評価は身体合併症に関するフィジカルアセスメントの知識、実施頻度、困難感（開始前・終了直後・終了 2 週間後に質問紙調査）、演習時の録音データ等を用いた。第1案の評価を基に教育プログラム（第2案）を作成、検討した。

Ⅲ. 倫理的配慮：聖隷クリストファー大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅳ. 結果

予備的調査は有効回答 230 名（有効回答率 55.4%）であり、実態調査は回収 727 名（回収率 56.1%）、有効回答 715 名（有効回答率 55.2%）であった。実態調査において、身体合併症の看護実践に対する不安に関して、「ある」「時々ある」「少しある」と回答した対象者は 98.7%であった。対象者が知識・実施頻度が低く、困難感が高いと回答したフィジカルアセスメントは、循環器系・呼吸器系項目であった。フィジカルアセスメントの困難感に関して、「身体科病棟勤務歴の有無」（ $p=.000$ ）で有意差を認め、「フィジカルアセスメントの知識」（ $r=-.399$ $p=.000$ ）では相関関係を認めた。すなわち、フィジカルアセスメントの「知識」「経験」がない対象者ほど困難感が高いとの結果であった。対象者が希望する学習内容は「身体合併症の早期発見のためのフィジカルアセスメント」、学習方法は「講義・演習を含む形式」が多かった。記述回答より、統合失調症患者の身体合併症に対する困難性の要素として「精神症状か身体症状かの判断の困難さ」「フィジカルアセスメント能力不足の問題」「精神症状による治療・看護介入拒否」等があがった。

教育プログラム（第 1 案）の内容

「フィジカルアセスメントの概要」「循環器・呼吸器のフィジカルアセスメントの基礎」「統合失調症患者の身体特性・有病率が高い身体合併症・抗精神病薬の副作用」「統合失調症患者の身体合併症を早期に発見するためのフィジカルアセスメントの実践」とした。方法はオンデマンド研修（30 分）と対面研修（60 分）（シミュレーション演習と事例学習）を組み合わせ、Kolb の「経験学習論」に基づき、研修終了後も臨床にてフィジカルアセスメントを実践するよう「能動的学習」を促す構成とした。

教育プログラムの検討

対象者は教育プログラム（第 1 案）の受講によって、循環器、呼吸器に関するフィジカルアセスメントの知識の獲得・定着、一時的な実施頻度の増加、困難感の軽減を自覚していた。シミュレーション演習の学習効果として、フィジカルアセスメントに対する「知識や技術の理解」「学習意欲の高まり」「臨床現場での実践への心構え」等を認め、事例学習では「合併しやすい身体疾患の知識の必要性」「身体合併症を予測しながらフィジカルアセスメントする重要性」「フィジカルアセスメントにおける事例学習の必要性」等を認めた。研修終了 2 週間後の統合失調症患者の身体合併症に対する看護実践の目標達成状況では 6 名が「できた」と評価した。教育プログラム（第 2 案）では、「統合失調症患者への看護実践」に関する学習内容を充実させるため、対面研修の実施を 2 回とし、シミュレーション演習・事例学習の時間を増やし、新たに「模擬患者による演習」を追加したプログラム案を作成し、専門職者 6 名から目標達成の可能性の評価を得た。

Ⅴ. 考察

精神科看護師のフィジカルアセスメントの実態調査結果から、特に循環器・呼吸器に関する知識や技術習得の強化が必要と考えられる。教育プログラム（第 1 案）の受講によって、精神科看護師はフィジカルアセスメントの基礎を理解し、実践への動機づけが高まり、臨床での実践につながったと考えられる。本教育プログラムの新規性は、精神科看護師への受講のしやすさ、統合失調症患者の身体合併症のアセスメ

ントに必要な体系的な知識の提供、苦手とするフィジカルアセスメントの強化、Kolbの「経験学習論」を基に知識と技術を統合し臨床の看護実践でいかせる学習方法を採用していることと推察される。教育プログラム（第2案）では、統合失調症患者に対する看護実践能力をより向上させるため、シミュレーション演習および事例学習の時間の十分な確保、模擬患者演習の導入等で、フィジカルアセスメント能力向上に寄与できると考えられる。

VI. 結論

精神科看護師は、オンデマンド研修および対面研修を取り入れた教育プログラム案の受講によって、統合失調症患者の身体合併症に関するフィジカルアセスメント能力向上の可能性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、統合失調症患者の身体合併症に対する精神科看護師のフィジカルアセスメント能力向上のための教育プログラムを検討することを目的としたものである。現状として、統合失調症患者の身体合併症の看護実践に対するフィジカルアセスメントに関する研究は存在していない。本教育プログラムの新規性は、精神科看護師への受講のしやすさ、統合失調症患者の身体合併症のアセスメントに必要な体系的な知識の提供、苦手とするフィジカルアセスメントの強化、Kolbの「経験学習論」を基に知識と技術を統合し臨床の看護実践でいかせる学習方法であるといえる。

審査においては、予備的調査、実態調査、教育プログラム作成の関係性について論述の不足、実態調査の結果記述の不備と整合性の不足、作成された教育プログラムの内容と評価等を具体的に論述する必要等が指摘された。研究者からは、研究の構成の具体的な記述の追加、実態調査の結果記述等の修正、実施した教育プログラム内容の具体性と修正について説明がされた。

今回の教育プログラム（第1案）の実施は、研究デザインが単群であり、他の教育プログラムとの比較ができていないこと、コロナ禍の影響等で研究計画当時の対象者数を確保できなかったことから、教育プログラムの効果の判断が難しい点が課題として示された。その課題に対して、今後研究者として統合失調症患者の看護実践向上のために取り組むことへの姿勢が語られた。

本研究において作成した教育プログラムは、専門職者から目標達成の可能性の評価が得られ、精神科看護師の統合失調症患者の身体合併症に対するフィジカルアセスメント能力向上に寄与できる可能性が示唆された。精神看護学領域の研究に新たな展開および具体的な活用が大いに期待される。

以上の結果から、審査委員会委員全員により、本論文が研究者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認められた。